石仏調査ニュース
ちがさきの石仏
※次号から茅今昔（かやいまむかし）と改題します。
詳しくは巻末をご覧ください。
第　16　号

発行
茅ヶ崎市教育委員会
茅ヶ崎市文化資料館
編集協力
文化資料館と活動する会
（民俗行事部会）
連絡先
〒253-0055
茅ヶ崎市中海岸 2-2-18
℡:0467-85-1733
e-mail:shiryoukan@city.chigasaki.kanagawa.jp

市内の石造物（石仏）から（六）

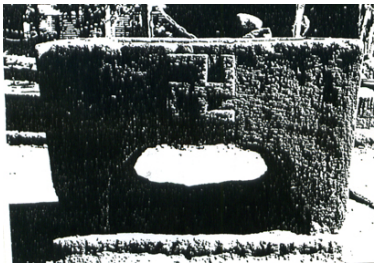
加藤　幸一

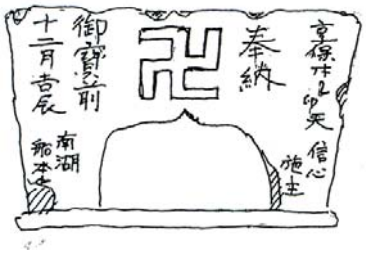
手洗い石の文字・文様（2）

一．卍（まんじ）文様

浜之郷、鶴嶺八幡社、拝殿前東に、今から約二八〇年前、享保二十年（一七三五）、市内で一番古い手洗石がある。

正面に卍の陽刻があり萩園、子ノ権現のものと貴重な文化財である。





この手洗石は「文化資料館調査研究報告書15南湖の浜降祭」の記録には、

江戸時代、元禄年間鶴嶺八幡社の神輿を浜之郷、南湖ほかの村々で担いでいた頃、ある年担ぎ終わって宮に返すべき神輿を南湖の若者がなかなか返さなかった。

浜之郷と南湖との争いとなり、その仲裁に入ったのが江戸屋八郎左衛門（初代）石垣と手洗石を八幡社へ奉納することで和解した、とある。

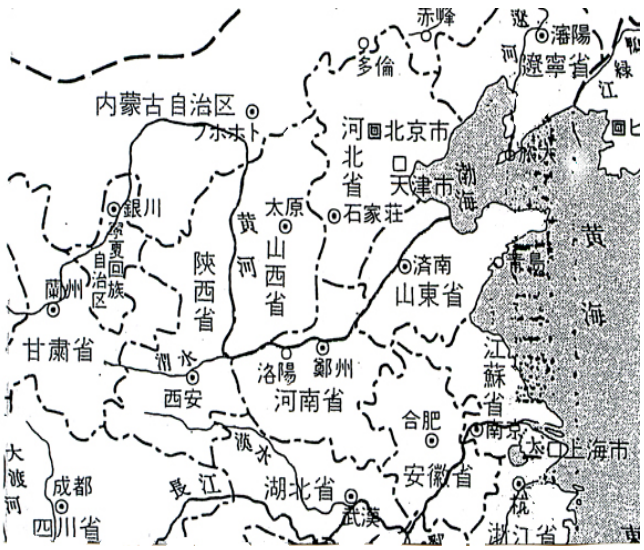
卍の文様があるのは当時、常光院（廃寺）が八幡社の別当寺になっていたからではないかと思う。

二．潔渭水

円蔵、神明大神拝殿西に、明治十年（一八七七）銘の小型の手洗石があり、正面に「潔渭水」とある。漢和辞典（旺文社）、「中華人民共和国行政区画図」等によると、「渭水（いすい）」は中国の川の名で、渭川、渭河（いが）とも呼んでいる。

甘粛（かんしゅく）省に源を発し陝西（せんせい）省をほとんどまっすぐ東に流れ、洛水（らくすい）などあわせて陝西、山西、河南三省の境を接する地点で黄河に合流、全長七八七キロ、流域は黄土の沃野で、周、秦、漢、唐の旧都がある。

渭水は、水が澄んでいるので清渭（せいい）とも呼んで



いる。

潔渭水とは、清い澄んでいる水のことで、この水で清めれば心身ともに潔浄することができる。また「渭水」は太公望でも知られている。

前十二世紀ごろ、周の文王が「渭水」の岸で、つりをする呂尚を見いだして「わが太公（祖父）のときから待ち望んでいた賢人だ」と喜んだという伝説、転じて魚つりをする人を太公望という。

呂尚は、文王の軍師となり、のち武王を助け殷を滅ぼし天下を平定した人である。

この地、懐島の館主懐島景能は、源頼朝を助け世の平定につとめたことから、呂尚になぞらえて「渭水」の名を手洗石の銘にしたのではと、先人の思いを想像する。

三．顯若

萩園、三島大神　拝殿東側に二本柱の手水舎の下に「顯若」の銘がある手洗石がある。「廣漢和辞典」下巻に「顯若とは、おごそか、厳正なさま、仰ぎ見るさま」とある。また、「萩園のうつりかわり」には、「うやうやしく清らかな水で手を洗い口をすすぎつつしんで神前にぬかずきという意味」と記述されている。

明治十二年（一八七九）建設、世話人三十二名、本村氏子中の銘がある。

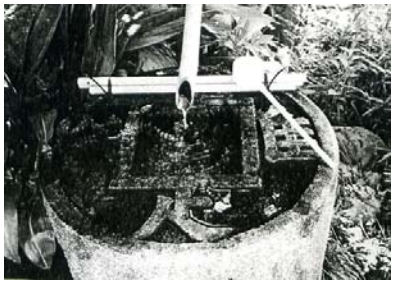
明治十四年の政変で、国政が変革するなかで活躍された先人のご尊名を知ることができる。

拓　茅ヶ崎館蔵

四．吾唯足知

松林三丁目、長福寺本堂前に、通称知足石と呼ばれている円筒型の手洗石がある。

高さ60糎、径72糎、茶庭に置く蹲にこの文字を見ることがある。



「知足者富」（老子）「足るを知る者は富む」現状を満ち足りたるものと理解し、不満を持たないこと（広辞苑）

吾唯足知（われたゞたるをしる）

裏面に　昭和六十三年五月　刻　五月現住隆興とある。石庭で知られている京都、龍安寺回廊から見る知足石は有名。

五．日新

小和田、熊野神社　拝殿前西側に、四本柱の手水舎の下に「日新」銘の手洗石がある。

日々に新しくなること。毎日旧来の悪習を改めること。と、念じながら参拝する。心引きしまる思いがする。

右側面に、弘化三年（一八四六）六月の銘。江戸後期のつくりだが重厚な感じがする手洗石である。

福島、会津

藩校の名が「日新館」。文武に励んだ少年、白虎隊、飯盛山、自刃、悼む。

手洗石「日新」の銘からその思いがひろがる。

六．龍

室田、八王子神社　拝殿に上る階段西側に山岡鉄舟書による「龍」一筆書を刻銘した手洗石がある。

山岡鉄舟（一八三六～一八八八）は、幕末の幕臣、剣客、政治家、江戸生まれ、通称鉄太郎、無刀流の創始者、幕府講武所で剣術の指南のち戊辰戦争の際には、勝海舟に協力、駿府に西郷隆盛をたずねて江戸開城のため勝、西郷会談への道を開いた。

維新後は明治天皇の侍従、勝、高橋泥舟とともに幕末の三舟と称され、ともに書をよくした。

手洗石の水口に龍像があしらわれているものをよく見るが、鉄舟の一筆龍の書を刻銘した手洗石は大変珍しい。全国を探してもおそらく当地だけのものであろう。

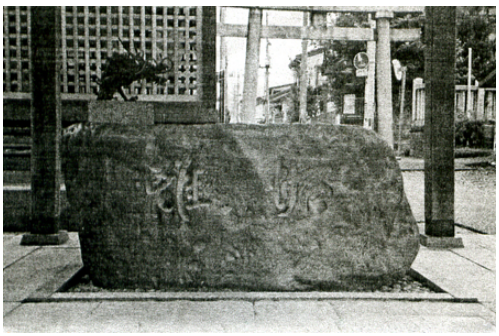
石造文化、書という芸術面においても優れた作品といえる貴重な文化財である。

左側面に、明治十九年（一八八六）戊十一月吉辰　とある。

参考「愚禅和尚物語」に、「龍神（水神）に日々四海の水を献上する」と記述。

七．垢離（こり）と手洗石

平成十一年八月、新潟県上越市直江津に用事があり、駅近くにある、八坂神社に参拝。境内に「垢離」と刻銘した自然石の大きな手洗石があり、珍しいので記録にとどめた。



裏面に明治四十三年（一九一〇）春四月吉日、世話人、寄附人の名、高田市、直江津町の奉納者名、水口には龍があしらわれている。

「垢離」とは、神仏に祈願するため冷水を浴び身体のけがれを除いて清浄にする。水垢離ともいう。（広辞苑）

垢離について、三つの絵図を見て、手洗石との係わりを考えてみたい。

絵図一・『伊勢参宮曼陀羅』では、

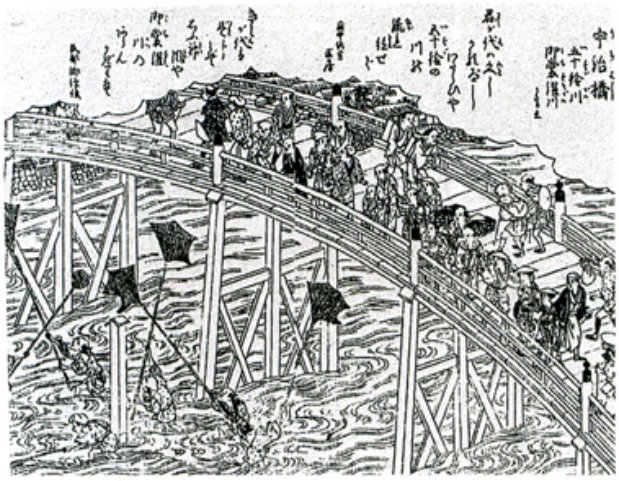
絵図１『伊勢参宮曼陀羅』一部（三井文庫蔵）

中央を流れるのが五十鈴川、下にかゝる橋が宇治橋、橋の上（上流）には、身分の高い人であろうか水垢離を行なっている人物が描かれる。

橋の上では参詣者と思われる三人が、川の中にいる人に「代垢離」を頼んで、なにがしかの銭を投げている。

絵図ニ・『伊勢参宮名所図絵』で、絵図一の橋の上と川の中の様子が良くわかる。

本来、参拝するときは、川に入って身を清めないと聖域に近づけない。それを、代参、代願と同じように代垢離があり、自分が川に入って水垢離する代わりに他人にその行為をお願いする。



「宇治橋」。橋の下には投げ銭を拾おうとする人たちがいる（『伊勢参宮名所図会』）

絵図２　『伊勢参宮曼陀羅名所図会』

絵図３『相州江の島弁才天開帳詣本宮岩屋の図』一部（広重）

絵図三・『相州江の島弁才天開帳詣本宮岩屋の図』（広重）では、子どもが裸になり参拝者に物乞いをしている様子、ご婦人方が何かを投げている様子。古くから大人が代垢離をしていた頃の仕種を子どもが真似している情景ではないかと推測できる。

戦乱の世がおわり、江戸時代一七世紀中頃より社会経済の発達と、ともに人々のくらしにゆとりがうまれてきた。

村の鎮守の神社はもとより、遠くはお伊勢参り、近くは、江の島、鎌倉、大山参りと、多くの人々が、家内安全、豊作祈願、商売繁盛、武運長久、病気平癒など、さまざまな現世利益を社寺にお願いする。当然のこと多くの参詣者、代参、代願、代垢離も多くなり、いつの間にか社寺前に手洗石が置かれるようになったのでは。

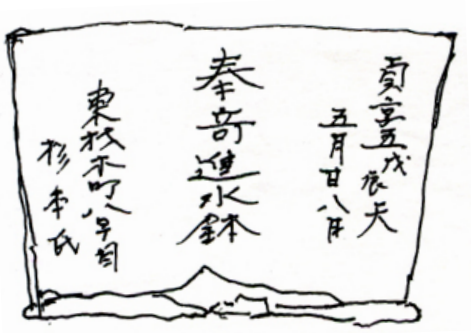
思うに手洗石は垢離の略式化したものと考えられる。

現手洗石の形で、社寺前に置くようになったのは、江戸初期の手洗石からみて十七世紀中頃からと思われる。

八・江戸時代初期の手洗石

目黒区下目黒の成就院は、別名「たこ薬師さま」の名で知られている。

境内にある手洗石は正面右に、貞享五年（一六八八）、中央に奉寄進水鉢、左に寄進者の住



まいと氏の名がある。

幅86糎、高48糎、奥行55糎、と小型、出会った手洗石のなかでは、古い方である。

この寺は、江戸前期会津藩主、保科正之の母（徳川秀忠の側室）お静の方の信仰厚き、そのためかお静地蔵がまつられ多くの参拝者がある徳川家ゆかりの寺である。

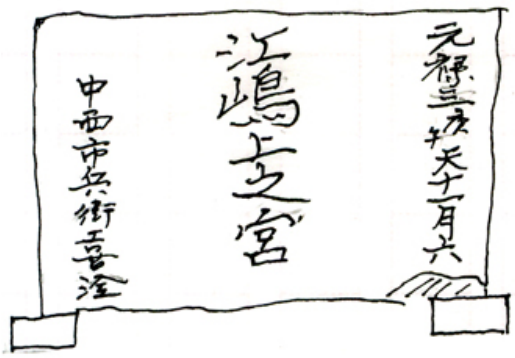
藤沢市江の島、中津宮に簡素でやや小型の手洗石がある。

正面右に、元禄三年（一六九〇）庚午天十一月、中央に「江嶋上之宮」と旧宮名が刻銘してある。

幅、約100糎、高さ60糎、奥行60糎。

江戸初期の手洗石は小型で簡素なものが多い。正面の文字は、水鉢、手水鉢、社名、奉寄進などが多く、よく見る奉納の文字は少ない。その地域の慣習や石工にもよることであろう。

鎌倉市坂の下、御霊神社境内に、元禄十三年



（一七〇〇）十七世紀最後の年の手洗石がある。

正面に「五霊宮」と旧社名が刻銘。

右側に、

「奉寄進手水鉢諸願成就皆今満足」と彫られている。右側面には坂之下村と奉納者の名。何か良きことが村にあったのか、〃皆今満足〃どんな良いことなのかイマジネーションが広がる。

（つづく）

上赤羽根の山王石

金子栄司

ひと月半ほど部会活動を休んでいた。その埋合せという訳ではないが赤羽根地区の路傍（宝積寺南側から六図）石仏再調査を引受けた。六月上旬の土曜日、藤沢市羽鳥、大三觜家公開一周年記念行事に参加した午後であった。

上赤羽根の山際に沿った道と田圃との間に新湘南バイパス茅ケ崎料金所付近にあったという道祖神といくつかの石仏がある。お宮形の石造物を調べていた時、通りかかった車の中から「うちに似たようなものがあるよ」と声を掛けられた。茅ケ崎市の石仏調査であることを告げ、調査報告書記載のご了解も頂いた。現地は赤羽根二七三四番地、O氏宅背後の山で南斜面崖際である。

唐破風付寄棟造、前面が開口した身舎というか塔身になっていて奥壁に二猿が半肉彫りされている。このような形を茅ケ崎市文化資料館では石祠と呼んでいるが石殿とか石宮とも呼ぶようである。造立銘が見当たらない。右手前の四角石燈籠は火袋を欠いていて中台が上下を逆さに積んである。柱正面中央に大きく宝永

六年（一七〇九）の年銘。石祠も同年頃のものか。

この石祠の特徴は、市内でよく見かける石祠に比べ肉厚な造りで重厚感がある。全体の構成バランスがよく、見た目に馴染む。二猿像を彫った石祠は市内唯一である。石祠をお守りしているご当主は「山王さん」と呼んだ。以前は耳の遠くなったお年寄りが沢山お参りに来たものだと教えてくれた。御利益があったらしい。山王さんと難聴・耳の患いはどのような因縁・由来によるものか。大変興味がわく石祠であった。民俗行事部会でも再調査をすることになるだろうと考え、造立の由来や祭り方、参詣の様子など深く伺う煩いをおもんばかった。興味を持つ人がいるので再度訪問するご了解をえて辞去した。

この石造物が造立された時期を概観すると、宝永四年（一七〇七）には東南海大地震が発生。四十九日後富士山大噴火で新山（宝永山）が出現、農家は降灰に悩まされた。翌年降灰地復興の役金が全国に課せられる。宝永六年（一七〇九）正月、五代将軍綱吉が病没し天下泰平の世は終わった。甲府宰相綱重（三代家光三男）の子、家宣が六代将軍を継ぎ早々に「生類憐れみの令」を廃止する。

室田永昌寺の清明貼符（せいめいちょうふ）

金子　栄司

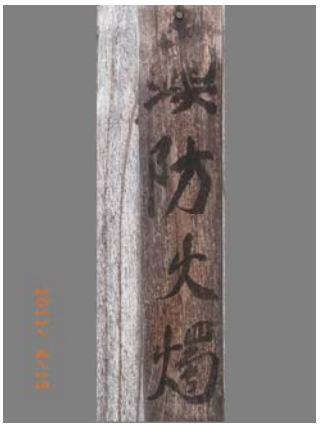
この貼り札を石仏調査で訪問した永昌寺で見た。左札の下二文字は読めなかった。最近なにかにつけ調べ事はパソコンに頼っている。悪い癖だがこの便利さは手放せない。

早速であるが、鎮防火燭（ちんぼうかしょく）のこと、立春大吉と対になっていると分かる。立春の早朝、禅寺では門に「立春大吉」と書いた紙を貼る習慣がある。同様に清明（新暦四月四日頃）に「鎮防火燭」火災除けの紙を貼る。それぞれを「立春貼符」「清明貼符」という。道元禅師が伝えた。現在は元旦から三日に行われる三朝祈祷会のお札として配られるところもあるようだ。「立春大吉」は一年間の厄除けと招福祈念の護符。裏から読んでも立春大吉と読めるように左右

対称に書く、邪鬼が振り向いたとき入ってきたのか出てきたのか惑わせる効果を持たせていて、鬼が入り損ね災厄から逃れることができる。

「鎮防火燭」は火燭（火災）を防ぎ鎮める護符、火の字を忌み火と燭の字の火を水の字に似せて書き火気を除ける。鎮防二字に三宝印を押すと『僧堂清規（しんぎ）』という禅宗寺院での日常生活の規則に書いてある。右に「立春大吉」左に「鎮防火燭」札を貼る。

火偏のくずし方に工夫が見られる。藤沢市南部と茅ケ崎市内の曹洞宗寺院では護符を貼る寺院は少ない。近頃の建物は火災警報設備や消火設備を備えていて、護符に除災の利益を求めなくなったのか。お札やまじないなどを避ける傾向によるものか。藤沢市渡内天嶽院は木札を山門と中雀門に貼る。「燭」の偏の火と旁の蜀の虫を入れ替えてある。赤羽根・宝積寺と大庭泉秋寺は「火」を小さく書く。室田永昌寺は「火」を水の字様に書き「燭」は火偏と旁の蜀の虫を入れ替える。永昌寺の護符は、「清規」にそって整え、本堂入口の柱に貼る。護符の周りの柱面は時代色が薄くなり年中行事として貼変えたあかしとなって残る。貼符に代表される清規を守り続ける日常から生じる気付きや思いやりが寺を守り人を守っているように思われる。



茅ケ崎市赤羽根・宝積寺

藤沢市大庭・泉秋寺

藤沢市渡内・天嶽院

茅ヶ崎の神社彫刻（その３）
室田八王子神社の龍

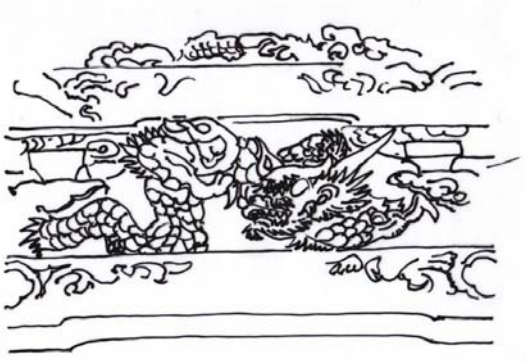
平野文明

ヤマタノオロチ　本紙一四号で、本村八王子神社にあるスサノオノミコトのオロチ退治の彫刻を紹介しました。ミコトがやっつけているオロチは、ヤマタノオロチという頭が八つある龍でした。今回は室田の八王子神社の彫刻を取り上げます。こちらの神社に登場しているのも龍です。

室田八王子神社

先ず神社の位置ですが、室田一丁目に市立室田小学校があります。神社は学校の南側、ほんの五〇メートルくらいのところです。

さて龍は社殿のどこに居るかといいますと、拝殿正面の、ぐっと張り出している部分（これを向拝といいます）の下の太い梁の上にあって、身をおどらせ、見る人をにらみつけています。本村の八王子神社との違いといえば、こちらは龍だけで、スサノオノミコトとクシナダヒメの姿がありません。しかしこの龍もヤマタノオロチで、ミコトとヒメを省略した絵柄だと思います。本村の彫刻が物語りの雰囲気を強調しているのに対して、こちらはデザインを重んじた迫力を感じさせます。



ヤマタノオロチ

この神社にはさらに二頭の龍がいます。拝殿の両脇に縁があって、それぞれの突き当たりの脇障子に一頭ずつです。向かって右側は尾が下にあるので天に向かう昇り龍、左側は尾を天に向け地に向かう下り龍と見て取れます。両方とも、それぞれの絵の下方で渦を巻いているのは水、上方に浮かぶものは雲でしょう。

向かって右　登り龍

向かって左　下り龍

山岡鉄舟書の「龍」　さて、この神社にはもう一つ「龍」があります。それは拝殿の場所から階段を下った所にある手水石に彫ってある山岡鉄舟書の龍の文字です。このことについては本紙に、加藤幸一さんが別に発表しておられますので、重複しないところを述べます。手洗石の全体の様子は加藤さんの文章にある写真と拓本で見ることができます。

幕末維新期に活躍した山岡鉄舟は多芸多才の人で、書にもたくさんの作品を残しています。その一つがどのような経過を経て室田八王子神社に残されているのかといいますと、山口金次著資料館叢書４『茅ヶ崎歴史見てある記』（昭和五三年　茅ヶ崎市教育委員会刊）に、「この『龍』の字の原書は、当村（筆者注　室田村）山本□□（□□は筆者）氏宅にある。喜捨主として名を出している、浦賀鈴木氏は、山岡家出入りの魚屋であった。当村山本家はその鈴木氏の妻の実家である」（一七頁）とあります。説明を加えますと、「この手水石を神社に奉納したのは魚屋として鉄舟の家に出入りしていた浦賀の鈴木さんで、鈴木さんの奥さんは室田の山本家が実家という関係から、この書の実物は山本家にある」となります。魚屋の鈴木さんは次のように考えたのでしょう。「お得意さんのご主人、鉄舟さんは書の大家だ。一筆お願いしたら「龍」の字を書いてくれた。すばらしいものなので、妻の実家がある室田村の鎮守様に、この文字を彫り込んだ手水石を奉納しよう」と。明治一九年のことでした。

山口金次さんはもう亡くなられましたが、茅ヶ崎の郷土史研究に大きな足跡を残された方で、文化資料館の開館を支えた一人です。山口さんはこの手水石の文字を『見てある記』に「龍日夜心温水」と読んでおられます。しかし、加

藤幸一さんの発表を読めばわかるように正しくは「龍　日献四海水」です。ここで急いで言っておかなければならないことは、『見てある記』は山口さんの著作ですが、その編集には当時文化資料館に勤務していた平野も携わっており、著者だけの責任ではないのです。ここで訂正しておきます。

「日献四海水」の文字列をパソコンの検索にかけてみたところ、「堀川紀夫のアート日記」というサイトに「龍」「家有壬癸神　日献四海水」と書かれた大訥愚禅という江戸時代末期の禅僧の掛軸の画像が出てきました。このサイトの所有者の堀川氏は〈大訥愚禅和尚さんの「一筆龍」。これを火防せ（火伏せ）の龍と呼んで魔除け災難除けの軸としている〉と説明しています。このサイトに対して熊谷幹男という人が、〈意味は「家には壬癸の神（水神）がおります　日々四海の水を献じましょう」となります。日本仏教での出典は「諸回向清規」です〉というコメントを寄せています。

また、永平寺七七世貫首瑞岳廉芳師の軸「龍日献四海水」を紹介した別のサイトには〈龍は壬癸神（壬癸は陰陽五行説では水を意味する）即ち水神である〉とありました。このように今も「龍　日献四海水」はいろいろの人が書いて、中には販売されているものがあることもわかりました。

そこでこの文言の出典とされる『諸回向清規』にはどのように出ているのかが気になり、これが掲載されている『大正新脩大蔵経』八一巻を見ました。六八五頁に「止火偈」と題して「寄語宋無忌（きごそうむい）。火光速入地（くぁこうそくにゅうち）。家有壬癸神（かゆうじんきしん）。日献四海水（じっけんしかーすい）。」とありました。この偈は火災除けの呪文のようです。しかし意味がはっきりしません。強引に意訳すれば、「宋無忌が言葉を発すると、火光は地中に消えた。家に祭る壬癸神に、毎日四海の水を供えよう」とでもなるのでしょうか。ここで注意しなければならないのは偈の中に「龍」の文字がないことです。「止火偈」の文言に、いつか「龍」の文字が加えられたと考えられるのですが、そのいきさつは、先に紹介した「壬癸が水を意味する」というところにありそうです。「壬癸」は十干の九番「壬」（みずのえ）と一〇番「癸」（みずのと）で、陰陽五行説では両方とも水性であることから、壬癸神は水神、その実態は龍と解されたのだと思います。

〈「つくい学」データベース〉というサイトには、相模原市緑区久保沢（合併以前は城山町久保沢）の久保沢観音堂境内にある天明四年（一七八四）建立石灯籠が紹介してあり、その銘に正面「秋葉大権現」、右側「寄語宋無忌　火光即入地　維天明甲辰」、左側「家有壬癸神　日献四海水　宿内安全」（傍点筆者）とあります。この石灯籠は火伏せ信仰で有名な秋葉大権現に、宿内安全を祈って献じられたもので、一筆龍と合体していない事例の一つです。

火事がそれた八王子神社　私がこの社殿を初めて見たのは昭和四六年で、四方の庇が深いのは今と同じでしたが、まだ草葺き屋根で、重厚な感じする建物でした。山口金次さんは『茅ヶ崎歴史見てある記』に「寒川町一之宮の日野屋（入沢家）の屋敷神の社屋であった」と書いています。

かつてこの社殿を県の指定文化財にと望んだ人がいました。その人の名は鶴田栄太郎。市内円蔵に住んで、郷土史と歌作にたくさんの業績を残しています。山口金次さんより先輩で、私などはお会いしたことはありません。その鶴田さんが、県の文化財保護専門委員会委員の会長古宇田実という人と、この社殿を文化財として神奈川県に指定申請したらどうかという話

をしたことがあると、自著『大山街道舌栗毛』下巻（昭和三四年五月本人刊）に書いています。結局この話は実現していませんが、「この宮は実に特種（ママ）建築で県下に類似の様式建造物は見当らず、社寺古建築研究上大切に保存されるべきであろう」とは鶴田さんの文章です（一一九頁）。同書にはまた、火難を逃れた社殿のエピソードが次のように紹介されています。「先年」とあるのみで何年ころのことかは分からないのですが、神社の北方、約一〇〇メートルに大山街道が通っていて、道沿いの精米所などが昼間の火事で焼けたことがあったそうです。黒煙と火の粉が北風にのって社殿の方に飛んでいる。どこからかこれを見た鶴田さんは、大事な建物を焼いてはいけないと駆けつけた。しかし村人は火事場に集まって神社には誰も居ない。そのうちに東隣の農家の草葺き屋根からも煙が上がり始め、そこの家人や近所の人たちがバケツリレーで消火を始めた。やがて消防自動車が疾走してくる。鶴田さんは消防車の前に立ちはだかり「延焼、延焼、文化財八王子神社を焼くな」とどなったと思うと書いています。消防車は農家の延焼を食い止めたが、今度はお宮の神楽殿の藁屋根がくすぶり始めた。

「消防の方々の大努力でこれも消し止めたのは茅ヶ崎市の文化史上特筆大書すべき事柄と今日尚感謝の意に満ちている。その農家と神楽殿が盛んに燃えだしたら万事休す（ママ）だった」とも書いています。

山岡鉄舟の火難除け一筆龍の威力だったのでしょう。

竜出よ漱盤の水春にして　　九一
漱水に竜影ひそみ春深し　　まさる
椎の木の下に置かれし漱盤に
鉄舟の書きし龍の一文字　　卓
鉄舟の気魄こもれる龍の文字
手洗鉢を撫でて賞でゐつ　　梅二

「九一」は飯田九一、「まさる」は小池勝、「卓」は青木卓、「梅二」は水越梅二の各氏で、鶴田栄太郎さんが火事の話の後に並べた作品から拾いました。

平成二三年八月二十日

文化資料館と活動する会／民俗行事部会

衣装整理の活動報告

茅ヶ崎市文化資料館では、自然・考古・民俗の分野で市民ボランティアの皆様と協力して調査・整理・保存などの活動を行っています。

民俗行事部会では石仏調査の他にも長年継続している活動として、衣類に分類される資料の整理を行っています。江戸末期から昭和まで、約七百点収蔵している衣装に、タグをつけ、資料カードを整理、作成し、今後の運用をしやすいよう、作業を行っています。今回はその活動の一端をご紹介いたします。

（平成二十三年　活動記録より）

六月二日　男物晴着（紋付、羽織、袴等）の整理

・男物袴の形

馬乗袴（うまのりばかま）　江戸時代の武士が乗馬用として用いた袴で、襠（まち）、相引（あいびき）を高く仕立てたもの。幕末の服制の改革で武家袴の中心とされ、近代男袴の代表となる。

行灯袴（あんどんばかま）　襠のない袴。明治時代、女学生用に工夫されたが、のちに男子も平常用に用いた。

・仙台平（せんだいひら）の袴がでてくる（※十月末に行う着物の展覧会でご紹介いたします）。精好織（せいごうおり）といい、袴地としてごく上質のもの。

八月十一日　特別展準備、展示用衣類の選別

・子供用（産着（うぶぎ）からお宮参り、初節句に関する物など）十一着選定

・大人の女性用（お宮参りに着ていく着物や婚礼衣装など）十七着選定

九月八日　特別展準備作業

・男性は、資料館裏手に生える竹林を切り出し、展示する衣装の衣紋掛（えもんか）け作成

・女性は、展示用衣類の名称を確定。衣類の生地のさわり心地や色味などから、徹底的に確認をする。

文化資料館　記

「めでたい着物展」見所紹介

文化資料館　佐藤　彩

お陰様で茅ヶ崎市文化資料館は今年で開館四十周年を迎えることができました。この節目の年、「茅ヶ崎」にこだわり続け、まちの自然・歴史を調査・研究し、収集・保存してきた資料約五万点のうち選りすぐりの衣装六十点を展示するべく、ただいま職員、民俗行事部会のボランティアと展覧会準備作業を行っています。中でも特に興味深い衣装三点をここに紹介します。

●大礼服（たいれいふく）・・大礼服とは、明治時代、宮中の盛儀や饗宴に列席する人々の最高の礼装をさします。一八七二年から一九四七年までこの服制はもちいられましたが、この衣装の持ち主は昭和十一年（一九三六）の紀元節宴会（きげんせつえんかい）と昭和十二年（一九三七）の新年宴会にて着用したそうです。上衣（じょうい）全面には金色の刺繍（ししゅう）（五七桐（ごしちぎり）に桐の蕾（つぼみ）の唐草）が施され、上衣周縁（しゅうえん）には雷紋（らいもん）もこれにあわせて施されています。和装から洋装へ、人々の服装が変化していく際の、特別な日に用いられた服装として展示いたします。

五七桐：花の数が五、七、五となっている

●万祝（マイワイ）・・茅ヶ崎は海に面しているため、古くから漁業が行われてきました。マイワイとは、漁業に携わる人々が人生に一度あるかないかの大漁の時に網元が従業員に配った祝い着のことです。

万祝：日露戦争模様

本展で紹介いたしますマイワイは、藍色の木綿友禅で背面に赤の祝い紋がついており、裾に日露戦争の様子が描かれているもの、亀に乗った浦島太郎と乙姫が描かれたものの二点です。意匠に違いはあるものの、特別な出来事に浮き立つ人々の心が見てとれます。

●黒絹縮緬紋付松竹梅模様袷女物留袖

（くろ　きぬ　ちりめん　もんつき　しょう　ちくばいもよう　あわせ　おんなもの　とめそで）・・

一見すると、なんてことのない留袖（既婚女性の礼装用の和服）ですが、裾にあしらわれた吉祥をあらわす松竹梅模様が見事です。松は松の葉が落下した松かさで示し、笹舟がちらちらと浮かぶ上に梅の花がのっています。足さばきによって見ることができたのでしょうか、着物の裏側、褄下にも梅が描かれています。目をこらしてみると、はっと気付かされるような、着ている人の奥ゆかしさを想像させる、そんな祝い着です。

これら三点の衣装は、十月二十二日より開催いたします「めでたい着物展」にてご覧いただけます。皆様のご来館を心よりお待ち申し上げます。

●〈編集後記〉

多くのご投稿をいただきまして、「ちがさきの石仏」第十六号を発刊するにいたりました。皆様そろっての熱心な執筆に感謝の意を述べさせていただきます。

加藤氏は、前号に引き続き、「市内の石造物（石仏）から」として、今回は手洗い石を中心に紹介しています。その一つ一つの刻銘から茅ヶ崎の過去、中国の伝説、かつての人々の慣習や想いを汲み、その広がりに驚かされます。

金子氏は、石仏調査の前段階に至る過程を彷彿とさせる内容です。特に、上赤羽根の山王石祠、市内唯一の二猿像については、今後の調査が待たれるところです。

平野氏は、前々号掲載「本村八王子神社の彫刻　剣を持つ男の正体」とつながる、茅ヶ崎の神社彫刻を紹介しています。氏ならではの、茅ヶ崎市に関する豊富な知識による記事で、茅ヶ崎市の歴史までも垣間見えます。

今回は金子氏、平野氏ともに火災除けに触れており、これもそれぞれの視点からお楽しみいただけます。

また、今号では民俗行事部会の衣装整理の活動報告、展覧会の見所も合わせて掲載いたしました。次号より、石仏に限らず様々な茅ヶ崎にまつわる話を掲載予定（詳しくはお知らせを参照）です。合わせてお楽しみいただければ幸いです。

（文化資料館　佐藤　彩）

※ご不明な点等ございましたら、１頁に記載しております連絡先にご連絡ください。なお、本誌はバックナンバーを含めすべて茅ヶ崎市文化資料館のホームページで公開しております。

（http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kankou/8137/010670.html）

〈石仏調査ニュース　ちがさきの石仏　改題のお知らせ〉

次号、十七号より「ちがさきの石仏　石仏調査ニュース」を「茅今昔(かやいまむかし)」と改題します。この名称には茅(茅ヶ崎)の過去、現在、未来について発信していくという意図がこめられています。今後は石仏のみならず、茅ヶ崎にまつわる民俗、歴史、自然などの多様な話題を掲載していきたいと考えています。読者の皆様からの寄稿をお待ちしております。